

降誕祭主日礼拝説教 「扉の向こうの光の中へ」

日本基督教団石神井教会 2016年12月25日

【旧約聖書日課】 イザヤ書 9章1、5～6節

- 1 闇の中を歩む民は、大いなる光を見
死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。
- 2 あなたは深い喜びと、大きな楽しみをお与えになり
人々は御前に喜び祝った。
刈り入れの時を祝うように、戦利品を分け合って楽しむように。
- 3 彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を、
あなたはメディアンの日のように、折ってくださった。
- 4 地を踏み鳴らした兵士の靴、血にまみれた軍服はことごとく
火に投げ込まれ、焼き尽くされた。
- 5 ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。
ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。
権威が彼の肩にある。
その名は、「驚くべき指導者、力ある神
永遠の父、平和の君」と唱えられる。
- 6 ダビデの王座とその王国に権威は増し
平和は絶えることがない。
王国は正義と恵みの業によって
今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。
万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。

【福音書日課】 ヨハネによる福音書 1章1～14節

- 1初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2この言は、初めに神と共にあった。3万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。4言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。
- 6神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。7彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。8彼は光ではなく、光について証しをするために来た。9その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。10言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。11言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。12しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。13この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。
- 14言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

「神によって生まれた」

「クリスマスおめでとうございます」と、皆さんをお迎えする朝に何の憚りもなく申し上げられる日曜日を、今年は与えられました。12月25日。4世紀以来、教会がキリストのご降誕を祝う祭の日としてきた日付です。わたしたちこの国に生きる者にとっては、この日は、祝いの日とすることが難しい日付です。けれども、今年は、堂々と、この祝いの日を祝いの日として、ここ教会で、共に祝うことができます。朝から、陽の最も高く昇っているときまで、ここで、礼拝に必ずやり、祝いの喜びを分かち合うときを過ごすことができます。

12月25日が日曜日ではない年に、わたしたちこの国に生きる教会の多くが、前倒しで直前の日曜日に御子ご降誕の祝いのおきを持つという慣わしを作ってきました。そのようなクリスマスの祝いの日曜日を迎えるたびに、わたしは、何とも言えない居心地の悪さを感じてしまうのです。クリスマス商戦真っ直中の世の中でさえ、24日のクリスマスイブまでは、大きな声で「メリークリスマス」とは言わないのに、肝心の教会が、クリスマスの日を迎える前に、いわばフライングでクリスマスを祝ってしまう。そのような日付になる年の方が圧倒的に多いのに、そのような習慣の教会で生まれ育ってきたのに、わたしはそのような習慣を受け入れという難しい思いを、長年持ってきたところがあるのです。

この前、12月25日が日曜日だった年のことを、皆さんは憶えておいででしょうか。5年前の2011年、東日本大震災の起こった年です。わたしは、その年のクリスマスのことを、強烈な印象で記憶しています。あの年、町々は、11月になっても12月を迎えても、例年のようなクリスマスのイルミネーションを飾ることを控えていました。教会でも、アドヴェントを迎えて、どのような装飾をしたらよいか、立ち止まらないではいられませんでした。そのとき、わたしは、前任地の教会で、教会の皆さんと相談して、毎年している電飾イルミネーションを取りやめることとしたのです。そして、「自分たちは、本当にクリスマスを迎えてよいのか」、「教会は、本当にクリスマスを迎えることができるのか」と、逡巡しながらアドヴェントの祈りを重ねました。4週間たっぷりのアドヴェントの期間が与えられていました。そして迎えたクリスマス。決して避けて通れない日曜日に迎えた12月25日クリスマスのときに、わたしは教会の皆さんと確かめ合ったのです。「神は、今年もクリスマスを祝うことを、おゆるしくださっている」と。

クリスマスの祝いの日付は、古代の当時の祭に由来するそうです。人の思惑で、人間の都合で、クリスマスの祝いの日を決められてきました。それ以来、教会の枠を越えて、クリスマスは、人のものになった。すべての人にとって「わたしたちのクリスマス」になった。けれども、本当は、クリスマスは、「神のクリスマス」です。人が定めた日付で祝おうとも、クリスマスは「神のクリスマス」です。何となれば、クリスマスは、ヨハネが告げているように、「**神によって生まれた**」方を祝うときだからです。神によって、神の思惑で、クリスマスは、クリスマスとなりました。たとえ、人がその日付を決めようとも、クリスマスは、「神のクリスマス」に他ならないのです。

「光は暗闇の中で輝いている」

わたしたちが今でもキリスト教国だと思っている北米の教会関係者の間で、今年の秋から大きな話題になっていたことが、伝わってきていました。今年の12月25日、教会は日曜日の礼拝を行うのかどうか、という話題です。最初、その記事を読んだとき、冗談かと思いました。しかし、どうやら本当なのです。本当に、北米の多くの教会の間で、今日12月25日の日曜日に礼拝を行うかどうかということが、議論の的になっているのです。しかも、それは、今年をはじめてのことではない。前回の2011年も、その前の2005年も、同じような議論があって、実際に多くの教会が、12月25日の日曜日の礼拝を行わなかったというのです。小さな教会の話ではありません。「メガ・チャーチ」と呼ばれる、毎週日曜日に何千人、場合によっては万の単位で人が集まり、礼拝を何回も行わなければならないような教会でも、同じことが議論になってきたというのです。12月25日には、たとえ日曜日であっても、教会にほとんど人が集まらないという現実があるのです。もちろん、前夜の24日には、大入り満員の礼拝をしている教会が、です。24日の夕べの礼拝にはこぞって出席している教会員が、翌日25日からは家族と過ごすクリスマス休暇に入ってしまう、教会にも来れない、というのです。

日本のある教会関係者は、この記事についてコメントして、「本末転倒も甚だしく、嘆かわしい」と書いていました。たとえ25日が日曜日でなくても、せっかく25日が祝日で休みなのだから、皆で教会に集まって礼拝したらよいのにと、この国に生きるわたしたちは皆、考えるでしょう。

けれども、24日の夕べには礼拝堂にあふれんばかりの人が集まるのに、25日の昼間の礼拝には、普段の日曜日には必ず来る人たちでさえ集まらないというのには、クリスマス特有の理由があるようにも思うのです。クリスマスは、朝日が昇り、日が高くなった昼間に祝うよりも、夕べの暗さの中で祝う方がよいかもしれない。なぜならば、夕べの暗闇の中でこそ、暗闇の中で小さなロウソクの光を点してこそ、よく分かる、大切なクリスマスの意味が、あるからです。

クリスマスの意味を深く理解するために、教会の先達は、最初の時代から、預言者たちの言葉を聴き直してきました。ことに、イザヤの預言は、初代の教会の人々に、クリスマスを語るのに欠かせない御言葉になりました。

イザヤは預言して言います、「闇の中を歩み民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」。この光として「ひとりのみどりごが…生まれた」。けれども、その光は暗闇の中で輝く光なのです。死の陰の中に灯る光なのです。御子のご降誕は、そのような光の訪れなのです。わたしたちの暗闇の現実の中に、一条の希望のしるしとして射し込んでくる光。それは、いまだ、あの復活の光のような、一点の曇りもない輝きに満ちた光とは違う、むしろ、深い暗闇の中で、ようやく見出すような光。真っ暗な部屋の扉の隙間から、わずかに入り込んでくる、扉の向こう側に満ちあふれている光の一筋。

そのような光を理解するのに、夕べの暗さは、確かに助けになるのです。

「わたしたちはその栄光を見た」

もちろん、だからと言って、わたしたちが、12月25日のクリスマスの祝いをやめてしまう必要はありません。ましてや、25日の日曜日の礼拝を、クリスマスの祝いでなくしてしまう必要もありません。わたしたちは、やはり、この日、クリスマスと定められた日の朝日が昇るのを見て、その日が高く天に輝くのを見て、クリスマスの希望を確かなものとさせていただくのです。あの、暗闇の中で見出させていただいた希望の光は、確かな光、高く天にまで昇って、すべての者を照らす光となる。そのことを、わたしたちは、この礼拝でも、憶えさせていた

だいているのです。この、日が高く昇る時間のクリスマス礼拝にあずかりながら、わたしたちは、なお、わたしたちの間にある暗闇の現実を、見るのです。真の光が高く昇れば昇るほど、わたしたちの現実の姿の中にある、深い暗闇、度し難いほどくっきりとした影となって現れる暗さを、わたしたちは、見ないわけにはいかなくなる。その暗闇の影は、わたしたちの足元にあるのです。

皆さん、わたしたちは、クリスマスに、まことの光としておいでくださった御子のお生まれを祝う喜びの中でこそ、なお、わたしたちの現実の中にまわりついている暗闇を、しっかりと見つめたいのです。すでにまことの光に照らしていただいて、わたしたちが光に包まれはじめているからこそ、その光によって露わになる影にも、その影の暗さにも、目を向けたいのです。わたしたちの内と外にある、暗闇の影。わたしたちの間になお深い溝のように横たわる暗黒の現実。

もちろん、わたしたちは、何よりも、すでにまことの光の一筋を知る者とされたことを、喜んでよいです。クリスマスに、喜んでよい。かつては、真つ暗闇の中にて、自分が暗闇の中に閉じ込められていることさえ、気づかずにいたのですから。それが、今は、たとえ、いまだに暗闇の現実の中に浸かったままだとしても、希望の光が射し込んできていることを、知るようにされているのです。

だからこそ、この光に、隅々まで照らしていただけるようになりたいのです。光に照らされて、今まで以上に暗く、黒く、陰に隠れるようになったところがあるのです。その暗さを、その黒さを、その陰の深さを、わたしたちは、御子の負ってくださったご生涯を通して、これから見つめていくのです。

教会学校の子どもたちと共に祝った23日のクリスマス・ページェント礼拝で、一つの星のしるしを紹介しました。クリスマスの星、ベツレヘムの星として描かれてきた星のしるしです。わたしたちがよく描く五芒星ではなく、十字が組み合わされたように描かれる星。その星のしるしが、ベツレヘムに輝いたあの星の姿として、描かれてきました。クリスマスにまことの希望の光を指し示すものとして見たベツレヘムの星は、十字のしるしを指し示すのです。十字架を、指し示すのです。

わたしたちの間に宿られたお方のしるしです。そこにこそ、まことの光に完全に照らし出された世界があるのです。その光の世界に、進み入りましょう。隙間から光の差し込むあなたの扉の向こうに、神の光の世界は、広がっているのです。